

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年 11月27日

日 時	平成28年 11月24日	時 間	10:00～12:00
場 所	金沢区役所リハーサル室	出席人数	13名
講 師	真田雅行氏	作成者	深澤勝美
テーマ	第二学習 芭蕉翁終焉記 ②		
概 要	<p>1. 芭蕉が到達した境地に対する其角の回想が続く。</p> <p>○ 混本寺の仏頂和尚の寺に参禅し教えを受ける。(蕉風の師となった出発点) お陰で老身になって枯淡の風体が自然に出て西行の真髓に近づけるようになり、このような自由な作風により自然と 春 夏 秋 冬の風雅や 須磨 明石の夜泊りや 淡路島のあけぼの等の風景を愛でるようになって、能因 兼好 西行等のまぼろしに誘われ(旅の神・道祖神に誘われて)ゆかりの地を訪ねることになったのであろう。</p> <p>○ 「住みつかぬ旅の心や置炬燵」 置炬燵は旅で生ずる寒き居心・仮の居場所の感じが一入である。</p> <p>2. 芭蕉は一生を旅に暮らしたいと思い江戸深川の庵を発ち最後の旅に出たこと、大坂で病に臥したこと等を述べる。</p> <p>○ 「鶯や笋藪に老いを鳴く」 夏になって啼いている鶯になんとか老いを感じ自らの老いと重ね合わせた句。</p> <p>○ 伊賀の古郷 大津の膳所 京都 奈良 大阪と門人宅を訪ね、大阪で病に臥す。 芭蕉は其角に大阪にいること、会いたい旨を知らせる。</p> <p>○ 芭蕉体力消耗が著しく苦しうである。</p> <p>○ 「此道を行く人なしに秋の暮」 前をみても後をみても歩いてきた道にはもう誰もいない自らは俳句一筋であった。</p> <p>○ 元禄7年長月晦の夜 下痢が激しく、物言う力もなく手足は氷のように冷たい。 知らせを聞いた門人達が各地から大阪に集まり、病状を気遣いながら看病する。 芭蕉は心神の乱れることなく、門人達を隣室に待機させる。</p> <p>○ 「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」 旅に病んでもみる夢(旅を続けたいという)は枯野をかけまわっている。 生前最後の句(病没四日前)となる。</p> <p>○ 最期の賀会(句会)で門人達が各自祈祷の句を詠む。 朝から食事を断ち不浄を清める。 吞舟と舎羅が付き添う。 (其角は手紙の行違いで遅れたが、堺から死の前日に大阪に駆け付けた。)</p>		
次回予定	平成28年12月8日 10:00～12:00	於: 金沢区役所リハーサル室	第一学習 赤井村石井家文書⑫